

# 命拾い

私は運と命（寿命）とは別であると考えている。病氣や災害も含めて、人の寿命は生まれたときから神様が決めていて、自分ではどうしようもない。人知

# 私の履歴書

一 匡 頭 江  
いち きょう がいら へ

⑧

こしたときだ。

手術するにも薬品さえ十分になかった。もうろうとした意識のなかで、医師である義父に担当医が「たぶん、助からないと思います」と言うのが聞こえた。「娘婿なので手術だけでも……」という義父。腹にメスが入る寸前に、私のことを聞きつけた米軍の軍医少佐が、箱いっぱいのパニシリンとストレプトマイシンを抱えて軍靴（ぐんか）

## 墜落機 前日 キャンセル

### 腹膜炎、米軍から貴重な薬

医師に恵まれ、今日の私がある。経験と知識は豊富になり、ついには社員の病氣までおよその見当がつけられるほどになった。正人先生の子息で私のゴルフ仲間でもある医師の佐田増美氏に、「君の体では、人生五十年持つにはいい方だ」と言われたことがある。まさにその言葉を裏付けるように、病魔との闘いはやむことがなかった。

生したときのことだ。佐世保での米軍専用タクシーの営業権を東京在住の米国人から譲ってもらったための交渉で上京していた私は、翌日朝の、そのもく星号で帰る予定にしていた。当時は東京・福岡の直行便はなく大阪乗り継ぎだった。

しかし、帝国ホテルでの交渉は価格でなかなか折り合わなかった。大阪に車を買に行くためキャンセル待ちをしていただけで、前日夜にたまにたま一枚を購入したのが運命を分けたのだ。その話をうかがったとき、思わず言葉を失った。



医師の恩人の先生  
命・佐田正人先生

き、思わず言葉を失った。何度か大病を繰り返しながら生きていた私が、この春で七十六歳になる。もく星号の時のように命の運にも恵まれた。予定した人生よりずっと長く生きたいものだ。この先、いくつまで生きるのか、困ったなと思うことがある。

の及ばないものだ。

これまで私は八回も手術をし、そのうち四度は命にかかわるほどのものだった。最初は指定商人時代。米軍上層部への大変な気遣いなどからストレスがたまり、十二指腸かいようになつたが、医師が手当てを誤り、穿孔（せんこう）性腹膜炎を起

のまま手術室に駆け込んでくれた。当時は米軍でしか使えない貴重なものだ。おかげで危機一髪のところまで命拾いできた。

三十五歳の時には過労や試食が響き胃を四分の三も切除した。胆のう壊疽（えそ）で担ぎ込まれたこともある。さらに直腸かいよう、肝炎、つい間板ヘルニアなど、私の体は手術の跡で傷だらけ。だが、命の恩人である佐田正人先生はじめ多くの

ときには、八十人あまりの医師やお世話になった方々を福岡の料亭「満佐」にご招待し、感謝の気持ちを申し上げたほどだ。病氣ではないが、これこそ神のおぼしめしとしか思えないようなこともあった。五二年のもく星号墜落事故だ。四月九日、日本航空の羽田発大阪行き便が伊豆大島の三原山に激突して、乗客乗員三十七人全員が亡くなるという痛ましい事故が発

い。とうとう相手側が「明日の正午に新しいオファーをする。それまで待ってくれ」と言う。当時の航空運賃は大変高かった。予定を変更すれば多額のキャンセル料がかかる。私は一瞬ためらった。「もういい」と一度は席を立ちかけたものの、なぜかふと気が変わった。相手の希望通り、帰りを一日延ばすことにし、日航の営業所で航空券

をキャンセルした。そして、一夜明けての墜落事故だ。人生の皮肉があることも後で知らされた。私が解約した席を後から手にした人がいた。事故の二十数年後、ロイヤルが本店用に神奈川県座間市の土地を購入したときの地主、吉岡照義氏のおいごさんがその人だったという。大阪に車を買に行くためキャンセル待ちをしていただけで、前日夜にたまにたま一枚を購入したのが運命を分けたのだ。その話をうかがったとき、思わず言葉を失った。

（ロイヤル創業者取締役）